

2)被災直後からの開業獣医師の活躍

震災直後の兵庫県内獣医師の活躍(中間報告)

被災動物の救護活動にあたった開業獣医師へのアンケート結果から

阪神・淡路大地震発生から4日後、兵庫県南部地震動物救援本部が設置された。そして、その5日後(地震発生から9日後)神戸動物救護センターが仮設され、続いて三田動物救護センターが設立された。しかし、神戸および三田動物救護センターの活動が始まり、その施設の存在および活動が周知されるまでの間、被災動物の救護、特に負傷動物の治療および保管等は、開業獣医師の主要な仕事になった。

本アンケートでは、地震発生直後から動物救護センターが設立されるまでの間、兵庫県内開業獣医師がどのような被災動物を、どのように取り扱ったかを調査し、来るべき災害に備えて議論すべき情報を提供したい。

調査が行われた時

平成7年6月1日から6月25日まで。

調査の対象

主に小動物診療に従事している神戸市獣医師会々員74名ならびに兵庫県獣医師会々員202名の計276名を対象とした。対象者はその被害の程度に応じて、全壊、半壊、一部損壊等に分けられた。

調査の内容

(1)動物を犬および猫に分け、来院の目的と施した処置を、1震災直後(1月17日)から神戸動物救護センターが設立される(1月26日)までの期間(第一ピリオド)、2神戸動物救護センター設立から三田動物救護センターが設立され、救護センターの存在が概ね周知される(2月10日頃)までの期間(第二ピリオド)、および3神戸および三田動物救護センターがフル稼働し、罹災動物の多くをセンターで扱うようになった期間(第三ピリオド)、の三つの時期に分け調査した。なお、この三つの時期は、混乱を極めた頃、やや落ち着きを取り戻した頃、および物事を冷静に考えることが可能になった頃と考えてもよい。したがって、厳密に区切ったわけではない。

(2)この三つの期間において、獣医師自身が動物を診て感じたこと、また畜主が動物に対してどのようなことを思い、また感じたかを聞き取り調査を含め広く調査した。

調査対象者の地震による被害

調査の回収率は、神戸市獣医師会および兵庫県獣医師会に所属している会員のそれぞれ70.3%および42.6%であった。調査回答者の地震による被害状況を神戸市およびその他の地域に分け、最初の図に示した。

兵庫県内の開業獣医師が治療した被災動物

(1)どのような被災動物が持ち込まれたか

兵庫県内の開業獣医師は、地震直後からさまざまな被災動物を治療した。治療のために動物病院に持ち込まれた被災動物は、単に自らの飼育動物に留まらず、知人から依頼された動物あるいは所有者不明動物に及んだ。特に、猫では所有者不明のものが予想外に多く、地震直後の混乱期でさえ、人々は動物を労る優しい心があつたことが推察される。各々の思いを持って、アンケートから得られた結果を解釈してもらいたい。

(2)被災動物はどのような治療を受けたか

どのような犬猫とも外科的治療を要した動物に比べ、内科的治療を要した動物が明らかに多く、食欲不振、下痢、嘔吐などを主徴とした。特に、大きな被害をうけた神戸市内では、地震直後から約10日間の間に、外科的治療を受けた被災犬229頭に対して、内科的治療を受けた犬は、その7倍にも及んだ。この傾向は時間経過とともに顕著になり、長期にわたる徴候であつたことが分かる。また、全般的に咬みつくなど常日頃では観られない神経質な患畜が多く見られ、上記の結果と併せ、震災によるストレス兆候が明らかに推察される。

さまざまな程度の障害を負った動物たちが持ち込まれたが、この大地震がなければ、決して動物病院には来院しないような軽度の障害が目についた。これらの結果はさらなる解析を要するが、興味深いデータである。

(3)開業獣医師の被害の程度と診療状況

この大地震によって多くの獣医師が大きな被害を受けた。しかしながら、持ち込まれる被災動物を治療するのが彼等の仕事であり、生き甲斐でもあつた。獣医師の被害の程度と治療した被災動物の頭数の関係を調べてみた。

(4)自らも被害を受けながら、さまざまな思いで被災動物を治療した。そうしたなかから、

- ・特に感じたこと
- ・震災以前に比べて、診療内容に何か変化が生じたか
- ・特に不満に思つたこと
- ・動物の地震予知について、何か感じることはあつたか

などについて意見を求めた。後編に原文のまま掲載した。これらの貴重な意見、感想および観察をさらに吟味し、来るべき大災害に備えたい。